

第 40 回 原子力安全検討会 議事録

日時：2022 年 11 月 4 日（金） 10:00～12:00

場所：WEB 会議 Webex

参加者：（五十音順、敬称略）

主査：高田（東大）、副主査：村上（東大）、幹事：粥川（北海道電力）

委員：小川（MHI）、織田（日立 GE）、河村（東芝 ESS）、桐本（電中研）、出町（東大）、中村隆夫（大阪大）、中村武彦（JAEA）、西川（関電）、芳原（近畿大）、村松（元東京都市大）、山本（名古屋大）、

配布資料

資料 40-1：第 39 回原子力安全検討会議事録（案）

資料 40-2：人事について

資料 40-3：リスク活用分科会の活動状況

資料 40-4：今後の原子力安全検討会における新テーマの提案について

参考 40-1：原子力安全検討会・分科会 名簿 20221104

参考 40-2：原子力安全検討会 小会議メモ

議題（当日の進行順に記載）

0) 参加者の確認、資料の確認

粥川より、参加者を確認し、資料はすでにメールで送付済のものであることを確認した。

1) 前回議事録の確認

粥川より、資料 40-1 および参考 40-2 の説明行い、了承された。特に質疑はなかった。

2) 人事案件

粥川より、資料40-2に基づき、吉原委員（関西電力）の退任および後任として西川委員（関西電力）、また、あらたにJANSIの鈴木様が常時参加者として参加されることが報告され、承認された。

3) リスク活用分科会の活動状況について

高田主査より資料 40-3 に基づき、リスク活用分科会の活動状況の以下の報告をいただいた。

①保全分野との連携を充実させるため東北大学の青木孝行先生を新たに委員として承認。

②原子力安全検討会の新テーマ（コミュニケーションに係る事例分析（仮称））に関する意見交換を実施。

③令和4年度講習会の開催予定。

4) 今後の原子力安全検討会における新テーマの提案について

村上副主査より資料 40-4 に基づき、新テーマに係る現在までの検討状況についてご報告いただいた。

ご報告では、当面の活動目的として、現状考えられる課題に対して、「コミュニケーション」をテーマにした調査を行い、その成果を技術レポートにまとめることとし、それに向けた具体的な体制案や活動計画についてのご提案をいただいた。

議論の結果、まずはリスクの考え方、受け取り、フィードバックの構造を上手く回すための取組、つまり「リスク認知のガバナンス」にフォーカスし進めていくこととなった。体制としては、WG や分科会のいずれかで進めることとし、活動期間としては、約2年程度を目安とし、まずは本検討会委員の各所属組織への調査内容をまとめるところからスタートする。

議論の詳細内容については、以下の通り。

Q：意図してるターゲットはあるのか？一般公衆の方にも知ってもらいたいという側面もあるが、これからコミュニケーションを行う事業者や産業界側というの也被えられる。

A：基本的な考え方のようなものを発行していった時に、最新の原子力安全の考え方が、原子力学会の中でも必ずしも一般化されていないという問題意識があつて作ってきたという側面もあると思つており、一般公衆の方や、原子力学会や学会標準を活用するような人たちの間でも横串を通すことが重要と考へている。

また、PSR+や IRDM 標準でも組織間の連携等については記載されているが、プロセスが明確になっていない。したがつて、この活動でその辺をまとめられたら良いと考へている。

C：情報を集めるときには、組織の中での文化醸成ラインとコミュニケーションラインが、どれだけ連携が取れているかを確認して進める必要がある。基本的考え方のようなものをどの分野が集約し、組織内に広めているのかを合わせて調査した方が良い。

C：プロセスの明確化という話があつたが、ステークホルダーの中で課題がどのように抽出され、電力の中でそれをどのように受け止め、反映し、アウトプットされていく、というプロセスが分かりやすく外に出てくるというのは重要だと思う。

若い世代、特に原子力をあまり知らない人たちにも、どのような仕組みで一般層の意見が原子力安全に反映されているのかを理解してもらい、安心感を持ってもらえるようなプロセスを示すということが特に重要である。

C：コミュニケーションという言葉が，人によって受け取り方が様々。議論したい方向性が揃うのかが心配。重要な問題提起はいただいたと思っている。

1 つは，安全の考え方に横串を通す。

1 つは，リスクの考え方，受け取り，フィードバックの構造を上手く回すための取組

2 つともやろうとすると発散するような気がする。

A：コミュニケーションにフォーカスするよりは，情報を回すということにフォーカスする方が良いと考える。

C:学術会議で継続的イノベーション小委員会が立ち上がっており，継続的イノベーションを実現するための課題について議論しており，本課題提案と同様の議論をしている。

リスク情報を回す仕組みが継続的イノベーションにとって重要であり，別な言い方をするとガバナンス。科学技術イノベーション 2050 委員会のレポートでは，多様な価値観を認めた上で，それらに対する社会の評価を加味して，かつデータや客観的事実に基づいて解決策の候補を求めて，それを社会に問うて一定の合意を形成する，実行に移していく段取りが求められていく，これをガバナンスと言っているが，今回の提案と同じであると思う。

コミュニケーションというと，どうしてもリスコミに議論がいつてしまうので，むしろリスク認知のガバナンスといった切り口で，主旨がくみ取れる言葉使いにした方が，議論がフォーカスできる。

学術会議での議論が参考になると思うので，高田主査，村上副主査へまずは送付する。

Q：まずこの 2 か年では，どちらかにフォーカスして進めていき，その先にまた新しいレポートでもう一つを進めるという方向で進めていくのが良いのではないか。

また，本検討会委員の所属組織の中でも意見を伺うという提案があったが，何か質問形式のような調査内容をまとめていただけるのか。

A：リスクの考え方，受け取り，フィードバックの構造を上手く回すための取組と言う方向で考えて，各組織への調査内容をまとめる。

C：その際には，組織内部として良い方向で回すというようなところも含めた質問，あるいはそこに関連する適切な部署へ配布いただけるように委員の方々にお願いするところからスタートになると思う。

C：具体的にどのようなことを聞くのかがまとまらないと，内部でも議論が難しいと思うので，まずは調査事項が明確になる必要が有ると考える。

C：最終的には，安全文化ということも含めて，原子力業界がしっかりやっていくためのガイドのようなものが最終的なゴールとしてめざすことになると思うので，電力だけでなく，いろんな業種を含めて参考になるものが出来上がると考えている。

分科会の下に WG という話を提案されているが，他学会での連携まで考えると検討会の下に分科会を置くのも良いのでは，とも考えるがどうか。立ち上げ時には WG，後に分科会というやり方もある。

全体の仕上がりを考えた時にどのレベルで検討するのが良いかを主眼におくのが良いと考える。

C：持ち帰り検討するが、分科会を作る方向が良いかもしれない。

C：形にこだわらずやり易いやり方で良いと思う。

C：安全性を確保することとコミュニケーションが成功することは違う。コミュニケーションが成功して外からの意見が取り入れられるようになったとしても、いままでのことがそのまま残っているのであれば、安全性の向上につながるが、コミュニケーションがうまくいったことに安心してしまうと、客観的意味でのリスクの低減への努力が止まってしまうことにならないか。安全性向上評価届出書は、非常に労力がかかって大変だという話はあるが、なんのためにやっているのかを考えると、事業者側でもっと良い提案をする必要があって、安全性に関して影響しているものを目に見える形にしておくことが必要である。安全検討会としては、そこにも答えを出す必要が有る。したがって、テーマをどちらかに絞るという話ではあったが、両方を上手く取り組めるようにするにはどうしたらよいかも考えていく必要があると思っている。

C：安心を伝えていくことと、安全を確保していくことは、一つの事が両方を指すとは限らないという認識はあるが、必ずしも今回の検討の中で 2 つともやらなければいけないこととは考えていない。安全を合理的にいい方向に持っていくのは、別途、標準活動の枠の中で考えていき、その成果を上手く発信していく、外部からのコメントを受けて安全に対して良い貢献をしていく、そのような枠を作るというのが、総合的な役割と考えるので、今後も検討会の中でしっかりと議論して良ければ良いと思う。

5) 次回日程

次回は 2023 年 2 月 1 日（水）10:00～12:00 となった。

以上